

存在文と存在否定文について¹

はじめに

当初非人称構文の全体について構想を得てこれについて考察を行うつもりであったが、ロシア語などにみられる非人称構文の一つの典型である存在否定文と、これに関連する存在文その他の考察が思いの外手間どり、紙幅の関係もあって考察をこの問題だけに限定することにした。

存在文はそれぞれの言語において特殊な位置を占めていると思われるにもかかわらず、管見の限りではこれを対象とする研究は極めて稀である。従ってこの問題については今後言語毎に資料の蓄積をはかり、詳細に検討されるべきであると思われる。この小論はそのためのささやかな問題提起に過ぎぬことを、特に断っておきたい。

この小論は次のような構成をもっている。

緒 論	§ 1	～	§ 7
本 論			
1. 存在文の種類	§ 8	～	§ 13
2. esse 型存在否定文	§ 14	～	§ 15
3. esse 型存在動詞の意義	§ 16	～	§ 18
4. esse 型存在文の主語	§ 19	～	§ 20
5. esse 型存在否定文の主語	§ 21	～	§ 22
6. esse 型存在否定文の人称構文	§ 23	～	§ 26
7. esse 型存在否定文の非人称構文	§ 27	～	§ 29
8. habere 型存在文	§ 30	～	§ 32
9. habere 型存在否定文	§ 33	～	§ 38
10. dare 型存在文	§ 39	～	§ 40

緒 論

§1 既に発表したいくつかの小論において²、動詞の意義的特性についての仮説を提示し、これに基いて考察を行って来た。これから考察しようとするものも、これまでの考察

¹ 『言語研究』第75号 昭和54(1979)年3月 1-30頁。

² 「A Consideration on the Category of Transitivity in Russian」『人文』第20集(1974)、「準他動詞について」『ロシア語ロシア文学研究』第8号(1976)、「古代ロシア語における第二対格について」『人文』第23集(1977)。

の結果を前提としている。従ってはじめて拙稿に接される方々のために、重複をおそれずその概要を述べておかない訳にはいかない。

§2 まず基本的な仮説として、第一に動詞の有する意義と他の品詞の有する意義との相違は、これが指示する対象乃至は対象の性質に関する相違というよりは、一定の意義を認識し、あるいは知覚する際の、認識の仕方における範疇的な相違であることを、仮定した³。

明らかように、これは諸品詞の中における動詞の意義的特性の位置に関する仮説である。

§3 第二の仮説は、動詞の有する意義的特性とは、言主が関与し表現しようとしている状況⁴を構成する一定の要素(状況の変化の担い手)が一定時間内に変化したことを感知し、変化した要素以外の状況をも考慮しつつこの変化を「様式化」したものである、ということにある。これは第一の仮説から必然的に生じる動詞の意義的特性とは何か、という問に関わる仮説である(動詞の意義を V 、認識に必要とされる一定時間に変化した状況を dS とすれば、比喩的にこれは $V : dS$ と表わすことができよう⁵。

§4 以上の二つの仮説に基いて、自動詞と他動詞について次のような定義をおいた。

すなわち行為を特定する状況の変化の担い手が主語に等しいとき、この行為をあらわすものを自動詞とし、行為を特定する状況の変化の担い手が、主語によってあらわされる対象だけでなく、それ以外の対象としても存在するとき、これを他動詞として規定する(従ってこの場合、状況 S の内部構造が問題とならざるを得ない。状況 S を構成する特定の要素 X の状態 S_x あるいは Y の状態 S_y の、一定時間における変化をそれぞれ dS_x , dS_y とし、附加的な条件の集合 K を考えれば、動詞の意義 V は、これら異質的なものの組に与えられる — 乃至はこれら異質的なものの組によって構成される — と考えることができる。自動詞と他動詞の規定から、自動詞の意義は $V(itr.):[dS_x, K]$ 、他動詞の意義は $V(tr.):[dS_x, dS_y, K]$ とあらわすことができる⁶)。

³認識という場合、厳密には発生論的なものと語用論的なものとに分たれるであろう。前者はいわば集団的認識にかかわり、後者は個人的である。しかし語用論的認識といえども、その背後には集団的認識の結果である具体的な語の意義の存在が前提とされている。従ってここでは両者の区別を行っていない。詳しくは拙稿「A Consideration...」参照。

⁴ここで「状況」といっているのは、「様式化」によって一定の意義を生ぜしめ、あるいは一定の発話を意味あるものとする状況乃至場であり、従ってこれは可変的なものである。アルチューノヴァ(Артюнова Н. Д., *Предложение и его смысл*, М. 1976)はこれを микромир「小世界」、макромир「大世界」あるいは мир「普遍的な世界」、фрагмент мира「世界の断片」などの用語によってその規模の区別をしようとしている。ズガル(Sgall, P., *Sémantická báze a grammatika*, SaS, XXXVIII, 1977, pp. 289-293)はこのような「状況」を Universum promluvy「発話の世界」と称し、そこに生起する pragmatics に関わる諸現象が、言語的意義にとって relevant なものであることを論じている。

⁵これは拙稿「準他動詞について」において採用した表記と若干異っているが、内容的には異っていない。

⁶動詞を特殊な語彙単位 lexikální jednotky sui generis として、いわゆる Valenztheorie の立場から、これに似た方向での研究の可能性を示唆したものに、フィリペツの最近の論文(Filipec, J., *Některé otázky*

§5 ところがこれによって作業を進めて行くうち、それ自身状況の変化の担い手ではないにもかかわらず、動詞の語彙的意義の構成要素として認める必要のあるものが生じた。例えば *перейти мост* 「橋をわたる」、*circumire alqd* 「あるものを迂回する」の類である。

この種の動詞についての考察の結果、これらが種々の場合において自動詞と他動詞との中間的性格を示すことから、準他動詞 *v. quasitransitiva* として別の範疇を立てることが妥当であるという結論に達した(すなわち $V(qtr.): [dS_x, S_y, K]$ である)⁷。

§6 更に古代ロシア語において、いわゆる第二対格⁸をとる動詞についての考察の結果、この種の動詞の意義には、以上の要素の外に類概念乃至状態を示すものが組み込まれており、かつ Y の状態 S_y がその外延に所属せしめられるように変化する、という条件が、附加的条件の中に含まれているという結論に立ち至った(この種の動詞を英文法に倣って不定全他動詞 *verba transitiva incompleta* と称し、この類概念乃至状態を Q 、上述の変化を $S_y \rightarrow Q$ と表示すれば、この種の動詞の意義は $V(tr. inc.): [dS_x, dS_y, Q, (S_y \rightarrow Q) \cup K]$ となる)。

これに対し準他動詞は規定によって Y の状態に変化がないのであるから、可能なものは $S_y = Q$ のみである(すなわち $V(qtr. inc.): [dS_x, S_y, Q, (S_y = Q) \cup K]$)⁹。

§7 このような不完全他動詞並びに準他動詞の意義との対比によって不完全動詞の意義として予想されるのは、類概念が組み込まれ、かつ X の状態 S_x がこれに含まれるように変化するか、あるいはこれに等しいものと置かれる、という条件が附加的条件 K に含まれると解することができる(すなわちこの種の類概念を P とすれば、 $V(itr. inc.): [dS_x, P, (S_x \rightarrow P) \cup K]$ または $[S_x, P, (S_x = P) \cup K]$ となる)。前者はたとえば *verba fiendi* のようなもの、後者は *copula* のような状態動詞の場合に相当すると考えられる。

本 論

I. 存在文とその種類

§8 ロシア語において非存在をあらわす非人称構文は、存在をあらわす人称構文と対応している。従ってこの種の非人称文を考察するにあたっては、まず存在文についての考察からはじめねばならない。

sémantiky sloves, SaS, XXXVIII, 1977, pp. 294–298)があるが、未だ着想の域を出ていない。コペチニーの所論(Kopečný, Fr., *Základy české skladby*, Praha 1962)についても同様である。

⁷詳しくは拙稿「A Consideration...」, 「準他動詞について」参照。

⁸英語の *objective complement* にあたる。

⁹詳しくは拙稿「古代ロシア語における第二対格について」参照。

ロシア語の存在をあらわす動詞には、*быть*, *существовать*, *иметься* などがあるが、最も典型的なものは *быть* (*esse*) であろう。ところがこれによる存在文は、ロシア語においては他と異った特徴を有している。現在形 *есть* の「省略」が通則となっていることである。たとえば *Книга там*. 「本はあそこにある」あるいは *Там книга*. 「あそこに本がある」の類いである。

未来形 *будет* 等、あるいは過去形 *был* 等が省略され得ないのは、これらが時称をあらわす為である、とする説明には一応首肯することができる。しかしこれを以って現在形 *есть* の「省略」の理由とするには、未だ根拠が薄弱である。単なる連辞の場合ならば、いわゆる零形式によって現在時称を爾余の時称から区別することは、さほど問題とするに当らぬかも知れない。しかし歴とした、しかも「存在」という重要な語彙的意義を担うべき *есть* が、さほど安易に「省略」され得るものかどうか、俄かには信じ難いところである。ここに *Книга там*. のような構文を *есть* の省略とする観方と、*там* を述語とみる立場の発生する余地が生ずる。後者の場合には、「省略」された *есть* は連辞と解することによって処理することを得るが、このような考え方にもやはり無理が残る。たとえば *Там книга*. のような場合このような解釈が妥当しないからである。

§9 翻って他の言語を観察すれば、たとえば英語の場合には、*There is/are + N_{nom.}* のような存在文は、爾余の平叙文とは異った形式を有している。ドイツ語の場合もまた、最も典型的な存在文の形式は *Es gibt + N_{acc.}* であって、平叙文としては特殊な構文に属する。

フランス語の存在文 *Il y a + N_{acc.}* も特殊な形式であり、ドイツ語と等しく非人称構文をとるが、これと異なる一つの特徴は動詞に *avoir* が用いられていることである。このように *avoir* 系の動詞が存在をあらわすのは、たとえば *We have many books in our university*. のように英語にもみとめられるが、これは構文上他の平叙文と異ったものではなく、存在文の主流をなすものではない。

以上の考察から存在文を、中核をなす動詞によって *esse* 型、*dare* 型、*habere* 型に分つことにする。

§10 *esse* 型の典型的なものは、先に述べた英語の場合であって、これは *There is/are + N_{nom.}* に対する否定文として *There is/are not + N_{nom.}* をもち、完全な対称をなす。これが他の構文と異なるところは、偏にこれが *there* 又は *here* のような場所の副詞を文頭にもち、倒置されるところにある。

ロシア語の場合 *Там книга*. 「あそこに本がある」はまた *Там есть книга*. とも表示することを得る。その際両者の間に存する相違は基本的には「存在」の強調の有無でしかない¹⁰。

¹⁰ セリヴェルストヴァ(Селиверстова, О. Н., Семантический анализ предикативных притяжательных конструкций с глаголом быть, ВЯ 1973, No.5, pp. 95-105)は *есть* の存

一方 Книга там. 「本はあそこだ」と Книга есть там. 「本はあそこにある」とは、存在の意義の有無による相違がみとめられる。別言すれば Книга там. は Книга есть. 「本がある」に там 「そこに」という副詞が附加されたものであると考えられる。とすれば Книга там. は真正の存在文ではなく、там それ自身が述語として立っているとみななければならない。これを裏付けるものとしてこの各々に対する否定文がある。Книга там. の場合 Книга не там. 「本はそこではない」、あるいは Книга не там, а здесь. 「本はそこではなく、ここだ」のような形になるのに対し、Книга есть там. に対応する否定文は、恐らく Там нет книги. となるであろう¹¹。

以上から Книга есть там. は Там есть книга. のヴァリエントであると考えねばならない。この両者の意義における差異は、むしろ文の機能的分節 aktuální členění větné に属すると考えられる¹²。

在と欠如に関しておおよそ次のように述べている。「y X есть Y」の場合には X が所有しうるある同質な集合 M に属する元または部分集合が X の所有下にあることを示すが、「y X Y」という構文は、質的に限定されていない Y の存在が予じめ知られているとき、X の所有にかかるこの Y がどのようなものであるかを示すときに用いられる。一方「y X Y」の構文は、「y X есть Y」の場合と異って、必しも Y が X の所有しうる集合の元乃至部分集合の一つでなければならないということを示すものではない。すなわち「y X Y」はこの点に関して無規定なのである (p. 104)。アルチューノヴァ(注4 参照)はこれを基本的には正しいとしながらも、両者について「相違の存するところは、есть を有する文は存在領域が対象の一定の集合として理解される状況に関わっているのに対し、есть を欠く文は、存在領域がどのようなものとして表わされているかに関わりなく、この領域が名詞に規定性を附与する点にのみ存する」(p. 278)としている。

ここから著者は、たとえば У нее есть седые волосы. 「彼女には白髪がある」と У нее седые волосы. 「彼女は白髪だ」を比較して、前者の седые волосы 「白髪」が一定の集合 M の不定の部分であらわすのに対し、後者の場合にはこれは у меня 「私に」、у нее 「彼女に」の形によって規定されるところの対象の集合全体を指すとする (p. 280)。この限りでは著者の見解はセリヴェルストヴァの見解と一致している。

しかし У нее седые волосы. における седые волосы は文末に立ち、いわゆる aktuální členění větné (後出)の立場からすれば、есть の欠如によってレーマ的性格を帯びやすいと考えられる。著者が У нее есть седые волосы. の否定文を У нее нет седых волос. 「彼女には白髪はない」とし、У нее седые волосы. に対応する否定文を У нее не седые волосы. 「彼女は白髪ではない」としているのも、このようなレーマ化と関連があると考えられる。この説は確かに体系的に斉一性をもっているが、У нее седые волосы. の否定文が У нее не седые волосы. だけであるという考えには賛意を表しがたい。У нее нет седых волос. をも含むと考えられるからである。セリヴェルストヴァの所説の「y X Y」における Y は、集合 M の部分であるかこれと一致するかについて無規定であるとする規定はこのことと関わっている。従って У нее седые волосы. はこの両者に対応する肯定文を共に含む、いわゆる sentence-homonym であると考えらるべきであろう。このようなことが生じるのは есть の存在による「強調」という、極めて曖昧な機能にもとづくためであるように思われる。

¹¹これと同じ考え方はアルチューノヴァ(注4 参照)にみられる。「人間の小世界 микромир の構成に関する文は、存在関係を次のような形の叙述関係に作り変えることができない。На столе книги и журналы. 「机の上に本と雑誌がある」→ *Книги и журналы на столе. 「*本と雑誌が机の上にある」、У меня есть книги. 「私のところに本がある = 私は本をもっている」→ *Твои книги у меня. 「*君の本は私のところだ」。これはこのモデルの局在子 локальзатор (у Маша 「マーシャのところに」、у меня 「私のところに」) が対象の場所的存在ではなく、諸関係の一定の体系の中心を示しているということによって、当然のこととして説明される」(pp. 238-239)。

「……他の局在文 локальные предложения と同じく上述の発話は伝達の倒置が可能であるが、その場合局在子は述語となる。Где Петя и Вера? 「ペーチャとヴァーリヤはどこにいる」、Петя и Валя у меня. 「ペーチャとヴァーリヤは私のところにいる」。他方 У меня есть сестра. 「私には姉がいる」、У нее есть дети. 「彼女には子供がいる」の意味で *Сестра у меня. *Дети у нее. ということはできない。Деньги у меня. 「お金は私のところにある」という文は、局在的意義をもち、所有の意義をもたない」(op. cit., p. 239)。

¹²Mathesius, V., O tak zvaném aktuálním členění větném, COJ.

何れにもせよロシア語の存在否定文の場合も *esse* 型であるが、英語のような場合と異った非人称構文をとる点で、肯定存在文とは非対称である。

§11 これに対して *dare* 型はドイツ語にその典型がみとめられるが、この型をとるのは極めて稀であるように思われる。シクロシチはこの型をとるものとして、ルーマニア語の *da grandine* 「雹がある=雹が降る」、*da neao* 「雪がある = 雪が降る」*da ploae* 「雨がある = 雨が降る」などを挙げている¹³。

これ等は共に非人称構文をもつが、なぜ *dare* 型が非人称構文をとるかについては、問題はなお開かれている。

§12 *habere* 型の一つの典型はフランス語の *Il y a + N_{acc.}*、あるいは *Il n'y a pas + N_{acc.}* である。これは明らかなように非人称構文であって、肯定文と否定文が対称的であり、かつその成分の中に場所をあらわす要素が含まれている¹⁴。

スラヴ諸語の場合、*habere* 型存在文は比較的多くみとめられ、その大部分は非人称構文をとるといふ¹⁵。たとえば古代スラヴ語では、

(1) МЫ НЕ НАДѢЕМЪ СЯ ЪКО СЪ ЕСТЬ ХОТАН ІАѢ НЗБАВНТИ. НЪ І НАДЪ
ВЪСѢМН СМНН ТРЕТНН СЕ ДЕНЬ НМАТЬ ДЪНЕСЬ. ОТЬ НЕЛНЖЕ СН БЫША
(Cod. Mar. p. 309)¹⁶

ἡμεῖς δὲ ἠλπίζομεν ὅτι αὐτός ἐστιν ὁ μέλλων λυτροῦσθαι τὸν Ἰσραὴλ ἀλλὰ γε καὶ
σὺν πᾶσιν τούτοις τρίτην ταύτην ἡμέραν ἄγει ἄφ' οὗ ταῦτα ἐγένετο. (Luc. 24:21)¹⁷

の形が既にみえる。訳文に挿入された *ДЪНЕСЬ* = *σήμερον* は形式的には主対格同形であって主語ともなり得るが、意義的には主語に立つことはむづかしい。非人称文とすべきであろう。

§13 ブルガリア語の場合、存在文はたとえば *Там има дърво*. 「あそこに木がある」、*Там няма дърво*. 「あそこには木がない」のように、肯定・否定共に非人称 *habere* 型である¹⁸。

¹³Miklosich, F., *Vergleichende Grammatik der Slavischen Sprachen*, IV, Syntax, Heidelberg 1926, p. 356. ドイツ語の *Reg(n)en ist*, 等の表現については, Regula, M., *Das Problem der Impersonalien in gegenstandstheoretischer und stilistischer Beleuchtung*, IF, 52, 1934, pp. 196-205. 参照。

¹⁴スペイン語 *haber* の三人称単数現在形 *ha* が非人称構文をとり、存在をあらわすとき *hay*(= *ha-y*) となるが、この場合の *y* も本来場所をあらわす。

¹⁵Miklosich (注13), p. 356 参照。

¹⁶Jagić, V., *Quattuor evangelium versionis palaeoslovenicae Codex Marianus glagoliticus characteribus Cyrillicis transcriptum*, Rep., Graz 1960.

¹⁷Nestle-Aland, *Novum Testamentum Graece et Latine*, 22 Auflage, Stuttgart 1963.

¹⁸Ghinina, St., Nikolova, Tsv., Sakazova, L., *A Bulgarian Textbook for foreigners*, Sophia 1965.

これに反してポーランド語で肯定文が人称 *esse* 型であるのに対して否定文が非人称 *habere* 型であるのは興味深い¹⁹。たとえば、

(2) *Tu jest twoja książka.*

「ここに君の本がある。」

(3) *Tu nie ma twojej książki.*

「ここに君の本はない。」

白ロシア語およびウクライナ語においても、*esse* 型存在文に対応する存在否定文 *н́быць*, *н́тъ* に加えて、*habere* 型存在否定文 *нема*, *немаш*, *немашка* などがみられるのは、著しい現象である。*немаш*, *немашка* などは二人称単数現在形による、いわゆる普遍人称文にその来源を求められるが、*нема* は明らかに非人称動詞である²⁰。

II. *esse* 型存在文

§14 すでに述べたように、ロシア語の存在否定文は *нет* + *N_{gen.}* であらわされる。この *нет* は本来 *н́тъ* であり、*не-е-тъ* *non-est-hic* の縮約して成った形であって、*esse* 型に属する非人称文を構成する。このように場所の表示を伴う *esse* 型非人称構文は、ミクロシチによればスロヴェン語、クロアチア語、ウクライナ語などにもみられるという²¹。英語の *There is /are not* + *N_{nom.}* も人称構文をもつが、これなどもここに属するものである。

§15 存在文の場合にも場所に関する限定詞を伴うことが多い。たとえば、

(4) *НАРНЦАХЪСА ПОЛАНЕ ОТ ННХЪ [⌈]ЕСТЬ ПОЛАНЕ В КНЕВѢ Н ДО СЕГО ДНѢ.*
(*Лавр. л. л.4*)²²

「(彼等は)ポリャネと呼ばれていたが、彼等からポリャネ族は今日に至るまでキエフににいるのである。」

(5) *ГРАДЪ ЖЕ БѢ КНЕВѢ НАЕЖЕ ЕСТЬ НЫНѢ ДВОРЪ ГОРДАТННЪ.* (*Лавр. л. 6453, л.15*)

「ところでキエフの城市があったが、そこには今ゴルジャタの邸がある。」

¹⁹Кротовская, Я., Гольдберг, Б., *Практический учебник польского языка*, М. 1965.

²⁰Ломтев, Т. П., *Грамматика белорусского языка*, М. 1956.; Medushevsky, A., Zyatкова, R., *Ukrainian Grammar*, Kiev 1963; Борковский, Б. И., *Сравнительно-исторический синтаксис восточнославянских языков. Типы простого предложения*, М. 1968.

²¹Miklosich (注13), p. 359.

²²Лаврентьевская летопись и суздальская летопись по Академическому списку, *Полное собрание русских летописей*, т. 1, М. 1962. によった。

場所の限定詞がつかない場合にも存在の場所が明らかであるか、もしくは推定することが可能である。

存在否定文の場合には、ロシア語にみられるように場所の限定は更にはっきり示される傾向があると思われる。たとえば、

- (6) томъ же лѣтъ рече князь михаилъ: “се у васъ нѣту владыкы, а не лѣпо быти граду сему безъ владыкъ.” (Новг. 1. л. 6737, л.108r)²³
「同じ年ミハイル公が言った。みよ汝等のもとには司教がいない。だがこの町に司教がいないのは良いことではない...と。」

- (7) нзаславъ же молващю мнѣ оунынъ нѣтъ в вѣгрѣхъ ни в ласѣ.
(Лавр. л. 6658 л.110)
「イジャスラフは我にウグリにもリャヒにも世襲領地がない、といていたが...。」

- (8) оу тебе ѿца нѣтъ а оу мене сна нѣтъ.
(Ипат. л. 6659, л.152)²⁴
「汝には父がなく、また我には息子がいない。」

これは нѣту(тъ) にはすでに場所の тутъ が要素として組み込まれているにもかかわらず、これが明確な限定性を失いつつあったところから、更に別の形で場所の表示が附加されたものと考えられる。これはたとえば英語の There is a book on the table. などにみられる事情と同じであろう。

III. esse 型存在動詞の意義

§16 以上の考察から「存在」の意義には、場所の意義がその構成要素として大きな意味をもっていることが窺われる。換言すれば「存在する」ということは、ある事象が一定の場所の構成要素であること、を意味するものであると考えることができる。たとえ一定の場所の表示のない、いわば普遍的存在を示す場合でも、それが「現実」あるいは「この世」のような場所の表示を implicit に含んでいると考えるのである²⁵。(これを再び図

²³Новгородская летопись старшего и младшего изводов, М.-Л. 1950. によった。

²⁴Ипатьевская летопись, Полное собрание русских летописей, т. 2, М. 1962. によった。

²⁵たとえばスワヒリ語には場所をあらわすものに三種ある。特定の場所をあらわす po、不定の場所をあらわす ko、場所の内部をあらわす mo がこれである。これらは現在の場合たとえば人称をあらわす要素と共に、それだけで存在あるいは存在否定をあらわすことができる。たとえば ni-po 「私はいる」、u-mo 「君は中にいない」、ha-tu-po 「我々はいない」、yu-ko? 「彼はいるか」など。また他の名詞の場合にも、それぞれの名詞の所属するクラスをあらわす前綴と共に、同じく存在あるいは存在否定をあらわす。たとえば Kitabu ki-po hapa. 「本はここにある」、Vi-su havi-mo nyumba-ni. 「ナイフは家 (Loc.)の中にない」など。他の時称の場合には「ある」を意味する (ku-)wa がやはり po, ko, mo と共に用いられる。たとえば Ni-ta-kuwa-po hapa kesho. 「私は明日ここにいるでしょう」、A-ki-wa-po hapa m-tu a-na-ye-taka ku-sema, a-simame. 「ここに読むことを欲する人がもしいたら、立ちなさい」など。このような例の存在は、「存在」の意義の占める「場所」の重要性について、極めて示唆的である。cf. Natalis, E., *La Langue Swahilie*, Université de Liège 1960, p. 62; Perrott, D. V., *Teach Yourself Swahili*, London 1957; Johnson, F., *A Standard Swahili-English Dictionary*, Oxford 1960; eiusdem, *A Standard English-Swahili Dictionary*, Oxford 1960. etc.

式的に示せば、場所を L として $esse$ の意義は $V(esse) : [S_x, L, (X \in L) \cup K]$ となる。 K は空集合であってもよいが、条件 ($X = animatum$) があれば日本語の「いる」に、($X = inanimatum$) であれば「ある」というように、空集合ではない場合も考えられる。もし L が普遍的な世界 U と等しい場合には、これを特に表示しないものとする。すなわち $V = (esse) : [S_x, (X \in U) \cup K]$ 。

たとえばチェコ語の *Spravedlnost jest* 「正義は存在する」、あるいは *Naprostá nicota není* 「完全な貧窮は存在しない」のような場合は、普遍的な世界が問題となっていると言える。

§17 聊か蛇足めくが、 $esse$ の意義をこのようなものであるとし、かつ一般にヨーロッパの言語では $K = \emptyset$ であるとすれば、これは $V(esse) : [S_x, L, (X \in L)]$ となるであろう。ある場所 L があり、主語のあらわす対象 X がこれに属する、という条件のみから成るのである。これは §7 の状態をあらわす不完全自動詞の意義 $V(itr. inc.) : [(S_x, P, (S_x = P) \cup K)]$ と酷似している。事実 L を類概念 P と読みかえれば、 $V = (esse) : [S_x, P, (X \in P)]$ となろう。これはすでに不完全自動詞であって、かつこの X と P の関係はアリストテレスの古典論理学の連辞による主述関係と完全に符合することになる。「存在」を意味する $esse$ がやがて不完全自動詞として「連辞」*copula* に転化してゆく経緯も、このように考えれば一つの必然であると思われる。因みに条件 ($X \in P$) は ($S_x = P$) の一つの特珠な場合、乃至は異った表現にすぎない。

§18 存在の $esse$ の意義をこのようにすれば、この存在が否定される時、場所の表示の必要が肯定文におけるより強く感じられるのは、むしろ当然であろう。現実存在するかあるいは存在すると信じられている場合に比べ、「存在しない」ことを証することは、対象そのものが欠如していることの故に、一般に遥かに困難である。ここに存在しなくとも他所に存在する可能性があり、たとえ現実には存在しなくても別の世界に存在するかも知れない²⁶。一定の場所的限定を与えて、少なくともその中には存在しないという必要が、肯定文におけるより強く感じられる所以である。

IV. $esse$ 型存在文の主語

§19 これまで述べて来たことから明らかなように、 $esse$ の意義を $V(esse) : [S_x, L, (X \in L)]$ とすれば、これは一定の場所的限定を *explicit* に示すか、あるいは *implicit* に含意した上で、行為の基本的な状態の変化の担い手たる対象 X が L の構成部分たるこ

²⁶ いわゆるモンターギュー文法はこの「世界」をも変数と考えようとしているようである。たしかにこれによって従来別のカテゴリーに属するとされていた命題の「真偽」と「有意味・無意味」が一元的に説明できる道が開かれるように思われるが、この点については浅学のため未だ詳にしない。cf. Bartsch, R., *Logik und Grammatik, Zeitschrift für Germanistische Linguistik*, 2-2, 1974, pp. 206-221.

とを示すのであるから、この対象 X は主語としてあらわされなければならない。これは話者が対象 X の存在を認知し、あるいはその存在を確信していることから極めて容易であり、かつ自然でもある。「存在する」という明瞭な語彙的意義を有するロシア語の быть の現在形 есть が場所の表示を伴うとき原則として省略されるのも、 esse の意義におけるこのような「場所」の重要性から理解することができる。

形式性、論理性の比較的強い言語にあっては、人称形のまま動詞を否定して存在否定文を作ることができる。英語の場合がそうである。この場合 esse の意義そのものの内部に変更はない。

§20 しかしより情感的な言語においてはこのような取扱いは必しも「言語感覚」に副うものではないと思われる。一定の場所乃至状況において一定の対象がその構成要素となっていないからである。

人は同一の状況に対して「本」がないということもできるし、またこの状況の構成要素ではない任意の事物の名称を以て本にかえることもできるであろう。一定の場所若しくは状況の構成要素たる対象をもつ存在文と並行する形式をもって存在否定を表示することに感覚的な違和感の生じる所以である。

しかし §1 の仮説によって、動詞のあらわす行為には、基本的な状況の変化(不変化を含む)の担い手の存在が、その認定のための必須の要件である。このような条件を考慮すれば、主語たるべきものは行為を認定する状況そのものの外にはないという結論に到達する。このように状況そのものを基本的な行為の変化の担い手とするものを非人称動詞とすれば、 нѣту が非人称動詞であるということは容易に説明することができる。

従って次のような仮説を提示することが可能となる。

仮説 1

非人称動詞とは、行為を認定する状況そのものを状況の変化の基本的な担い手とするものである。

V. esse 型存在否定文の主語

§21 しかしながら存在否定文がロシア語においてすべて非人称構文をとる訳ではない。歴史的にも人称構文と非人称構文は極めて早い時期から並存しているのがみとめられる。たとえば古代スラヴ語において非人称構文をとるものとしては、

(9) $\text{ѢКО НѢСТЬ ВЪ ОУСТѢХЪ НХЪ ИСТИНЫ. СРДЦЕ ІХЪ СОУЕТЬНО ЕСТЬ:}$
(*Psalt. Sinait. 4b16-18*)²⁷

²⁷ Северянов, С., *Синайская псалтырь, глаголический памятник XI века*, Rep. Graz 1954.

ὅτι οὐκ ἔστιν ἐν τῷ στόματι αὐτῶν ἀλήθεια, ἡ καρδία αὐτῶν ματαία. (Sept. Psalmi, 5-10)²⁸

- (10) СЪМОТРИТЕ ВРАНѢ, КАКО НЕ СѢЖѢТЪ НИ ЖЫИЖѢТЪ, ИМѢЖЕ НѢСТЪ СЪКРОВНИШТА НИ ХРАНИЛИШТА І БѢ ПИТѢЕТЪ ѿ (Cod. Zograph. 180-9)²⁹

κατανοήσατε τοὺς κόρακας, ὅτι οὐτε σπεύρουσιν οὐτε θερίζουσιν, οἷς οὐκ ἔστιν ταμιεῖον οὐδὲ ἀποθήκη, καὶ ὁ θεὸς τρέφει αὐτούς. (Luc. 12:24)

これらの例において古代スラヴ語の文中下線を施したものは、何れも生格形をとっている。

これに対して нѣсть の存在にもかかわらず主格に立つ名詞を伴って人称構文をとるとみられるものも多い。たとえば、

- (11) МНОГА ЕСИ СТВОРИЛЪ ТЫ ГІБЖЕ МОИ УДѢСА ТВОѢ: ꙗко помышленіемъ твоимъ нѣсть кѣто оуподобити ти сѧ (Psalt. Sinai. 52b3-6)

πολλά ἐποίησας σύ, κύριε ὁ θεός μου, τὰ θαυμάσια σου, καὶ τοῖς διαλογισμοῖς σου οὐκ ἔστιν τίς ὁμοιωθήσεται σοι. (Sept. Psalmi 39-6)

- (12) НѢСТЪ ОУЧЕНИКЪ НАДЪ ОУЧЕНТЕЛѢМЪ, НИ РАБЪ НАДЪ ГМЪ СВОИМЪ. (Cod. Zograph. 21-11)

Οὐκ ἔστιν μαθητὴς ὑπὲρ τὸν διδάσκαλον οὐδὲ δοῦλος ὑπὲρ τὸν κύριον αὐτοῦ. (Matth. 10:24)

これらの二つの構文のあいだの共時的な使用の相違については、テキストに共通すると思われる一定の傾向と、写本によって異なるものとがあるように思われるが、その詳細については未だ詳にしない。

§22 古代ロシア語においても事情は同様であった。たとえば、

- (13) А ДРЕВЛАНЕ ЖИВАХЪ ЗВѢРНИНСКИМЪ ОБРАЗОМЪ, ЖНОУЩЕ СКОТЪСКИ: ОУБНВАХЪ ДРЪГЪ ДРЪГА, МДАХЪ ВСА НЕУНОСТО, Н БРАКА ѿ НИХЪ НЕ БЫВАШЕ. (Лавр. л. ПСРЛ. л. 5)³⁰

「ところでドレヴリャネ族はけもののように暮し、家畜のように暮していた。たがい

²⁸ Rahlfs, A., *Septuaginta, id est vetus testamentum graece iuxta LXX interpretes*, ed. sexta, Stuttgart.

²⁹ Jagić, V., *Quattuor evangeliorum Codex Glagoliticus olim Zographensis nunc petropolitanus, characteribus Cyrillicis transcriptum notis criticis prolegomenis appendicibus auctum*. Rep. Graz 1954.

³⁰ Лаврентьевская и троїцкая лѣтопись, *Полное собрание русских лѣтописей*, т. 1, Санкт-Петербург 1948. 再録に当たって1962年版に変更した。

に殺し合い、すべてを不潔なままに喰らい、しかして彼等のもとには婚姻(生格)がなかった。」

- (14) **И РАДНИМНУН, И УЫАТНУН, И СЪВЕРЬ ОДННЪ ОБЫУАН НМАХЪ: ЖИВАХ
В ЛѢСѢ, ЯКОЖЕ ВСАКИН ЗВѢРЬ ЯДѢЩЕ ВСЕ НЕУНСТО, СРАМОСЛОВЫЕ
ВЪ НИ ПРЕДЪ ОТЬЦН И ПРЕДЪ СНОУАМИ. БРАЦН НЕ БЫВАХЪ ВЪ НИ, И
НГРНЦА МЕЖЫ СЕЛЫ.** (ibid. л.5)

「ところでラヂミチ族もヴァチチ族もセヴェル族も同じ習慣をもっていた。あらゆるけものと同じく森に棲み、あらゆるものを不潔なままに喰らい、彼等のあいだでは父や姑の前で卑猥なことばを吐く。彼等のあいだには婚姻(複数主格)はなく、村々のあいだの「かがひ」があった。」³¹

このような並存の状態は比較的長く続き今日に至っている。ただし現代ロシア語においては非人称構文が一般化し、人称構文は若干特殊なニュアンスを帯びるとされている。すなわち現代ロシア語における存在否定の人称構文は、一般に主語の指す対象が特定のものである場合に用いられているのである。たとえば Гости не будут. 「(待っていた)客(複数主格)は来ないだろう。」これに対して Гостей не будет. の場合には、一般的に「客など(複数生格)は来ないだろう」という表現になる³²。

VI. esse 型存在否定文の人称構文

§23 これまでの行論からすれば前節で述べたような存在否定文における、人称構文と非人称構文のあいだにみられるニュアンスの相違は、次のようにして説明することを得得であろう。

人称構文の場合、ある普遍的な場所乃至状況における著目する対象の存在が、話者によって認識されるかあるいは確信されてはいるが、発話の内容とすべき場所乃至は状況 *L* の構成要素とはなっていないときに用いられる。もしこの仮定が誤っていないとすれば、主語となるべき対象は少なくとも *U* の構成要素であるから、*V(esse)* の基本的状況の変化の担い手たり得る。従ってこれは主格に立ち、人称構文となる。またこの文はその主語が特定の場所の構成要素ではないことによって否定文となるが、主語の指示する対象が特定のものであることにはゆるぎがない。

このように普遍的な場所 *U* と局限された場所 *L* との関係が問題となるとき、ロシア語ではこれを統辞論のレヴェルで扱い、語彙的にはこれに相当する区別を立てないが、今仮にこのような意義をもつ動詞 *esse*₂ が語彙的にも存在すると仮定すれば、その意義は図式

³¹ cf. Георгиева, В. Л., *История синтаксических явлений русского языка*, М. 1868, p. 82.

³² cf. Бабайцева, В. В., *Односоставные предложения в современном русском языке*, М. 1968, p. 82; АН СССР, *Очерки по исторической грамматике русского литературного языка XIV века*, т. III, *Изменение в системе простого и осложненного предложения в русском литературном языке XIX века*, М. 1964, p. 306.

的には次のようなものとなろう。すなわち $V(esse_2) : [S_x, L \subset U, (X \in (U - L))]$ 。これは明らかに存在否定動詞ではなく、存在動詞の一種である。

§24 существовать (exsistere) も esse と同じく verba exsistentiae に属する動詞であるが、この場合にも上記のような対立は明らかにみとめられる。非人称構文をとる場合はたとえば、

- (15) Не существовало ни крыши, ни оконных рам, ни дверей, ни полов. Все, что способно было гореть, сгорело. (Павлен. *Счастье* 1-1)
「屋根も、窓枠も、ドアも、床もなかった。燃えるものはみなもえてしまった。」

これに対して人称構文の場合にはたとえば、

- (16) До нашего 1812 года не существовало правило касательно безусловной сдачи столиц. (С. Глинка, *Зап. о м.*, 3)
「問題の1812年までは首都の無条件引渡しに関する規則は存在していなかった。」

両者共過去の一時点においてある事象が存在していなかったことを述べているが、前者がその時点で存在していなかったことに叙述の重点があるのに対し、後者の場合には、後にその規則ができて存在したことを含意している。

これに対して次のような人称構文もみられる。

- (17) Думают доказать доводами, что бог не существует.
(Фонв. *Чистосердечн. призн.* 3)
「人々はさまざまな論拠によって、神が存在しないことを証明しようと考えている。」
- (18) Если б, в самом деле, у нас женщина не существовала как лицо, а была бы совершенно потеряна в семействе, тут нечего было бы и думать об актрисе. (Герцен, *Сорока-воровка*)
「もし実際我国において女性が個人として存在せず、完全に家庭に埋没してしまっていたならば、女優について考えることは無意味であつたろう。」

例(17)においては「神は存在する」というのがフォンヴィジンの確信なのであり、例(18)の「女性」の個人としての存在は、動詞の接続法が示すように自明の事実なのである。

§25 これに対して次のような例はどうであろうか。

- (19) Владимир уже не существовал: он умер в москве. (Пушк. *Метель*)
「ヴラヂミルはもはや存在しなかった。彼はモスクワで死んだ。」

これは人称構文であるが、かつて存在したものがあつた時点では存在しなくなったという点では、非人称構文をとる例 (15) と全く同じである。しかし例 (19) の場合には固有名詞であらわされる具体的な人物ヴラヂミルが、かつて存在していたにもかかわらず、モスクワで没して当時すでに居なかったことをあらわすのに対して、例 (15) ではその時点における存在のみが問われているのである。

例 (16) の場合も、すでに述べたように、1812 年以降「規則」が存在していたことを含意している。このようにある時点には存在しなかったものが、一定時点以降に存在するようになった、あるいはなるであろうことを含意する場合に、人称構文が用いられることが多い。たとえば

- (20) Хотя в 1612 году великолепная церковь Святого Сергия, высочайшая в России кололольня, две вашии прекрасной готической архитектуры и много других зданий не существовали еще в Троицкой лавре, но (Загорск. Ю. М., 3.5)

「1612 年には壮麗な聖セルゲイ教会、ロシアで最も高い鐘楼、華麗なゴシック様式の二つの塔およびその他多くの建物が、未だトロイツカヤ大修道院には存在していなかったが、.....」

- (21) Журнал из Моздока в Тифлис получишь после, потому что он еще не существует. (Гриб. Пут. зап. 2)

「モズドクからチフリスへの雑誌を君が受けとるのは後になるだろう。それが未だ存在していないからだ。」³³

§26 これらの例から存在には時間の観念も介入して来ることが明らかとなる。しかしこれは存在の意義にとって場所の観念に匹敵するほど本質的なものではなく、況んやこれにとって替り得るほどのものでないことも、また明らかであろう。この種の意義を § 23 で述べた同じような意味で仮に語彙化し、 $esse_3$ とすれば、 $V(esse_3) : [S_x, L, (X \notin L_t) \wedge (X \in L_{t'})]$ となろう。これもまた明らかに存在否定ではなく、存在文の一種である。人称構文の用いられる所以である。この外存在をあらわすものにたとえば *статья*, *иметься* その他があるが、これ等については割愛せざるを得ない。

VII. esse 型存在否定文の非人称構文

§27 § 21 の行論ならびに同節の仮説 1 から、 $V(esse) : [S_x, L, (X \in L)]$ に対して予想される $V(non-esse) : [S_x, L, (X \notin L)]$ における X の存在が単なる仮定にすぎないとすれ

³³ Бабайцева, *op. cit.*, p. 306.

ば、これが状況の変化の担い手とはなり得ぬことから、нѣтуの意義を $S_x = L$ として一応 $V(\text{нѣту}) : [L, L, (X \notin L)]$ と考えることができる (§ 29 参照)。

この場合肯定文の X に当るものの表示が問題となる。存在否定の非人称構文ではこれは名詞の生格によってあらわされる。これが主格として主語に立たないことはこれまでの考察によって明らかであるにしても、何故これが生格に立たねばならぬかは、依然として問題として残っている。

これに答えるためには、生格の機能についての考察が別個に必要とされよう。従ってここではこの機能を仮説の形で提示する外はない。すなわち仮説 2 である。

仮説 2

生格の機能は生格に立つ名詞の示す意義が他のものと何等かの関係にあることを示すところにある³⁴。

いわゆる動詞あるいは前置詞、形容詞などの支配 *rectio* については、個々の語彙の通時的な考慮も必要とされる。従ってこれを一応措くとすれば、上述の仮説は生格が名詞の示す意義そのものではなく、当該名詞の示す意義の他のものに対する関係の存在を示すことを主張するものであり、かつその関係についてはその質を問わないことを述べるものである。

§28 名詞類と共に用いられる生格 *genetivus adnominalis* の用法を念の為概観すれば次のようになる³⁵。

a) 所有の生格 *g. possessionis*

たとえば *дом отца* 「父の家」、*книга брата* 「兄の本」など。

b) 関係の生格 *g. relationis*

たとえば *член партии* 「党员」など。

c) 全体の生格 *родительный целого*

これは古典文法で部分生格 *g. partitivus* に含まれていたものであるが、これとは逆の関係にある。*g. totalitatis* とでもいうべきか。たとえば *крышка дома* 「家の屋根」など。

d) 規定の生格 *g. qualitatis*

たとえば *человек веселого нрава* 「快活な気質の人間」のようなもの。

³⁴ 同様の考えはコペチニーにみられる。Kopečný, Fr., *Základy české skladby*, Praha 1962, p. 49.

³⁵ АН СССР, *Грамматика русского языка*, т. 1, М. 1960. による。

e) 材料の生格 *g. materiae*

たとえば *рама красного дерева* 「赤い木の枠」、*кабинет карельской березы* 「カレリア産白樺の書斎」など。

f) 徴条の担い手の生格 *p. носителя признака*

これは古典文法の *g. subiectivus* の一部をなすもので、被規定語が専ら性質をあらわす意義をもつようなものを指す。たとえば *запах мыла* 「石鹸の匂い」、*храбрость воина* 「戦士の勇敢さ」など。

g) 主体の生格 *g. subiectivus*

前項のものに対して被規定語が主として行為をあらわすものである。たとえば *пение артиста* 「芸術家の歌」など。

h) 対象の生格 *g. obiectivus*

たとえば *выполнение плана* 「計画の完遂」、*чтение книги* 「読書」など。

i) 計量の生格 *g. mensurae*

これに属するのは、たとえば *бутылка вина* 「ワインーびん」、*тонна картофеля* 「じゃがいも一トン」など。

§29 明らかにこれらの用法は何れも 仮説2 に包含される。もし *a* の *b* に対する関係を仮に *Rab* とあらわすとすれば、*X* に当る名詞の生格は *Rx* であらわされる。これはそれ自身関係の表示としては充足していない。関係すべき他の項を欠くからである。従ってこれはただ *X* なるものが何等かの意味で「関与している」ことを表示するにすぎない。

いわゆる否定生格 *g. negationis* を、もしこれによってあらわされるべき対象が一定の場所乃至状況の構成要素でないときに用いられるものとすれば、それはこのような機能の然らしむるところと考えられる。対象 *X* を示すべき名詞が生格に立つのは、いわば「*X* に関して」あるいは「*X* に関して言えば」というほどの意味をもつと考えられるからである。もしそうとすればこれはテーマ・レーマの図式のテーマをあらわすものに極めて近い機能をもつ、と言うことができよう。

ここから§27 に述べた *нѣту* の意義の表示を変更して $V(\text{нѣту}) : [L, R_x, (X \notin L)]$ とすることが提案される。§27 の場合には *X* に当るものの表示が不可欠であるにもかかわらず、欠如しているからである³⁶。

³⁶ 日本語の助詞「は」は主語をあらわす「が」に対して主題をあらわすとされるが、たとえば (1) 「本が机の上にある」に対する否定文が通常 (2) 「本は机の上にはない」であるのも、これと関連する現象ではなからうか。もしこれが正しいとすれば (3) 「本は机の上にある」は助詞「は」の主題性の故に特定の対象を示すことになり、また (4) 「本が机の上にはない」という文は、§23 で述べた *esse₂* の意義によって本が ($U - L$) に存在することになり、本の存在が予め前提され、従って特定の対象となるのではないかと思われる。専門家の御高見を仰ぎたいと思う。

VIII. habere 型存在文

§30 英語においてもたとえば *We have much snow in Japan.* のような *habere* 型人称文が結果的に存在を示すことがある。これはたとえば *They have their own culture in America.* のような文と比較すれば直ちに明らかになるように、*in Japan, in America* のような句がなくとも、*We* あるいは *They* という主語自身によって、既に一定の場所的限定が表示されていると解される。

一般に *esse* と *habere* は意義的に極めて近く、ロシア語においては所有の意義は、たとえば *У меня книга.* 「私のところに本がある = 私は本をもっている」のように、*esse* 型存在文をもって表現するのが常である。*habere* に当る *имѣть* は却って「有する」というような文体的制限をもっており、その使用が局限されている。管見の限りではたとえばスワヒリ語などもこれに類似した表現形式をもっている。たとえば *A-li-kuwa na mali.* 「彼は財産をもっていた」は、文字通りには「彼・過去・ある + 共に + 財産」である。

§31 ところでたとえば本を手を持っている人を想像すれば明らかなように、*habere* は少なくとも初原的には「ある対象 Y の状態がある対象 X の状態の一部を構成している」ことをその原義としていたと考えられる。これを仮に *habere*₀ とすれば、この意義は $V(habere_0) : [S_x, S_y, (S_y \subset S_x)]$ と表示されよう。

しかし「 X の状態」はやがて拡大解釈され、次第に抽象化して「 X の勢力圏」をも意味するようになったと思われる³⁷。この場合にはもはや「 Y の状態」ではなく Y のみが問題となるであろう。

このように拡大・抽象化された *habere*₀ を *habere* とし、「 X の勢力圏」を L_x で表示すれば、その意義は $V(habere) : [S_x, S_y (Y \in L_x)]$ となるであろう。

これらを $V(esse) : [S_x, L, (X \in L)]$ と比較し、かつたとえば *У меня книга.* 「私のところに本がある = 私は本をもっている」と *Я имею книгу.* 「私は本を有している」を参照すれば、次のような関係が成立するであろう。

$V(esse) :$	$[S_x, L, (X \in L)]$
	$\swarrow \quad \searrow \quad \updownarrow \quad \updownarrow$
$V(habere) :$	$[S_x, S_y (Y \in L_x)]$

両者の間に存在する密接な意義的關係はかくして論理的にも明白となる。因みに *У меня книга.* のような文における $L = y$ *меня* は事実上 L_x に外ならない

³⁸ 両者の相違は偏にこれを語彙的意義の中に組み込むか、あるいは統辞的レベルで

³⁷ アルチュール・ヴァ(注4)の *микромир* は正確にはこの勢力圏を指している。

³⁸ これと同じ考え方はアルチュール・ヴァ(注4)にみられる(p. 238)。「このタイプの文における人物の名詞は決して具体的な指示関係 *референция* をもつことがない。**У меня есть этот брат.* 「*私はこの弟をもっている」、**У нее есть тот муж, которого ты только что видел.* 「*彼女は君がたった今見たところのその夫をもっている」ということはできない...人物の名は論理的アクセントを失うこともあるが判断の主体となることはできない。このタイプに従って **Тот сын у нее.* 「*その息子は彼女のだ」という文はできない。*Тот мальчик ее сын.* 「その子供は彼女の息子だ」とすべきである。」

処理するかという点に存するにすぎない。

§32 一方もし *habere* において状況の変化の基本的な担い手を、行為を認定する状況乃至場所そのものであるとすれば、これは仮説 1 (§20) によって非人称構文となる。この時には前節の場合とは逆に L_x は単なる L に転化するに違いない。このような非人称構文の *habere* を *habet-impers.* とすれば、その意義は $V(habet-impers.): [L, S_x, (X \in L)]$ となろう。これが存在文にすぎぬことはもはや明らかである³⁹。

スラヴ諸語に多くみられる *habere* 型存在文が殆んどの場合非人称構文をとるというミクロシチの観察も⁴⁰、かくしてその論理的基礎を獲得するのである。たとえばブルガリア語では Там има параход. 「そこに汽船がある」、セルボ・クロアチア語では Има језера где нема купатила. 「浴場のないところには湖がある」。フランス語の $Il y a + N_{acc.}$ もこれに属するものである。

IX. *habere* 型存在否定文

§33 前節に述べたことから *habere* 型存在否定文は、これを語彙化すれば $V(non-habet-impers.): [L, S_x, (X \notin L)]$ もしくは $[L, R_x, (X \notin L)]$ となるであろう。

存在文と完全に平行する *habere* 型存在文をもっているものにたとえばブルガリア語がある。Тук има тетрадка. 「ここにノートがある」— Тук няма тетрадка. 「ここにはノートはない」。

これに対してたとえばポーランド語においては存在文の場合には主として *esse* 型人称構文、存在否定文は *habere* 型非人称構文をとる。たとえば Tu jest twoja książka. 「ここに君の本がある」— Tu nie ma twojej książki. 「ここに君の本はない」、Tu są nowi studenci. 「ここに新入の学生達がいる」— Tu nie ma nowych studentów. 「ここには新入の学生達はいない。」⁴¹

このような現象の由って来る所以は、これまでの行論から容易に理解できるであろう。存在文の場合には、状況の変化(乃至不変化)の担い手としての着目する対象が、話者の考えている場所 L または普遍的な世界 U の構成部分であることを、言主が認めるかあるいは確信しているのであるから、これが主語となりやすいのは当然である。すなわち *esse* 型人称構文である。

これに対して存在否定文の場合には、着目する対象がいかなる状況の構成要素でもない

³⁹*habet* 型存在文における場所の意義と位置との重要性は、スワヒリ語の *na* が場所をあらわす前綴 *pa-* 「ある場所」、*ku-* 「不定の場所」、*m-* 「場所の内部」と共に用いられる例に端的にあらわれている。たとえば *Pana ndege nyingi pa mti.* 「多くの鳥が木の上にいる」、*Kuna watu wengi pa kilima.* 「多くの人々が丘の上にいる」、*Mna mikate mitatu katika mfuko.* 「袋の中に三個のパンがある」など。cf. Natalis, E. (注25), pp. 63–65.

⁴⁰Miklosich (注13), p. 356.

⁴¹Кротовская, Я., Гольдберг, Б. (注19), p. 101.

ところから、存在文に較べて少くとも相対的には、これを主語とすることはむづかしいであろう。また現実には存在するのは具体的な場乃至状況であるから、これを「主語」とすることがより自然であろう。存在否定文が *habere* 型非人称構文をとり易いと考えられる所以である。

§34 また着目する対象がいかなる状況の構成要素にもならないという、まさにそのことによって、これが *habere* 型非人称構文の際に生格形をとる傾向があるのも、よく理解できる。この生格は、補語として対格を支配する動詞が否定された時に用いられる、いわゆる否定生格と密接に関連しているが、この生格の使用はスラヴ語の内部においても必しも同じではない。ポーランド語はこの否定生格の使用を厳格に守っている言語の一つであるが、他方たとえば現代チェコ語のように、対格の使用が漸次一般化しつつある言語もある。

現代チェコ語の場合、コペチニーによれば否定生格をとるのは、たとえば、*On neměl peněz*. 「彼は金を持ってはいなかった」のような物質あるいは集合名詞、あるいは *Nemáte práva nás kritizovat*. 「貴方が我々を批判する資格はない」、*Nezažil jsem dojmu mocnějšího*. 「私はかほどに強い感銘を受けたことがなかった」のような抽象名詞に関するものが本来であって、*Ale pojednou zjistil, že nemá zbraň*. 「しかし彼は直ちに彼が武器をもっていないことを確めた」のような具象名詞は、対格をとるとする⁴²。ここから彼はこの否定生格の機能を、部分生格 *g. partitivus* の機能に由来するものであると考えている⁴³。複数形の場合に否定生格が用いられやすいというのも、この限りでは首肯できる。

しかし彼は同時に *Já ty peníze nemám*. 「わたしはそのお金を持ってはいない」、*Já takovou knihu nečtu*. 「私はそのような本を読まない」のように、指示代名詞などによって特定化されたときには、対格が用いられると述べている。しかし対象が特定のものであるか否かと部分生格の意義とは、直接には結びつかない。また彼は *Neměl groše*. 「彼は鏰一文持ってはいなかった」、*Ani slova ze sebe nepravil*. 「一言も自分からは言わなかった」のようなものを、*Nezamhouřili oka*. 「彼は目を細めなかった」と同じく、いわゆる代表単数とし、これらの場合には否定生格が用いられるとしている⁴⁴。彼は種類をあらわすということによって、部分生格との関連を考えているのであろうが、これには無理がある。「鏰一文」、「一言」のように単数の意義がむしろ強調の意味合いを帯びるようなものを、代表単数と同列に論ずることはむづかしいと思われるからである。むしろ前者のようなものは、「特定性」の一つの表現とみるべきではあるまいか。

§35 ロシア語の場合、補語としての否定生格の使用は未だ一般的であるが、対格の使用

⁴²Kopečný (注 6), p. 216.

⁴³Hausenblas, K., *Vývoj předmětového genitivu v češtině*, Praha 1958, p. 93. に同趣旨の主張がある。

⁴⁴Kopečný (注 6), p. 217.

も漸次増加しつつある。アカデミー文法によれば⁴⁵、この場合にもチェコ語におけると同様に部分生格と関連づけて、「行為がその部分に及ぶ可能性が除外されているとき」に対格が用いられるとする。たとえば、

(22) Борюшка, не накликай беду! (Гонч.)

「ボリュシカ、災難を呼び出すなよ。」

(23) Ты Игнат, лишнее на себя не бери. (Баб.)

「イグナート、お前余計なことを引き受けるんじゃないよ。」

人名などもこの意味でこれに属せしめられている。たとえば、

(24) Клим давно знал, что не любит Лидию. (Горьк.)

「クリムは母がリヂヤを好いていないことを、ずっと以前から知っていた。」

(25) Райский пришел домой злой, не ужинал, не пошутил с Марфенькой, не подразнил бабушку и ушел к себе. (Гонч.)

「ライスキーは腹を立てて家に帰り、夕食もとらず、マルフェンカと冗談も交さず、お婆さんをからかうこともせずに自分の部屋に引こもった。」

一方アカデミー文法はたとえば Не забудь чемодан. 「トランクを忘れるなよ」、Почему ты не выпил молоко? 「なぜ君はミルクをすっかり飲まなかったのかね」のように、話者と聞き手に共通して知られているものについては、対格が用いられるとする。「特定性」である。

以上通覧すれば、ロシア語の否定生格もチェコ語におけると同じ使用の傾向をもっていることが知られる。

§36 我々の立場からすれば、この種の用法は仮定 2 と §29 において述べた否定生格の機能との関連において、説明することが可能であると思われる。すなわち一定の場所 L 乃至は普遍的な世界 U の構成要素ではない対象について立言しようとすれば、それは「 X を」ではなく、「 X に関して言えば、それを」というように表現することの方が却って事態を正確に言語化することになると考えられるのである。従って §33 の *habere* 型非人称存在否定文の意義は、この場合 $V(non-habet-impers.): [(L, R_x, (X \in L))]$ の方を採ることになる。これに対し人名あるいは限定性をもつ対象の場合には、それが一定の場所の構成要素であることは、予め前提されていると解される。これを $non-habet-impers_2$ とし、この意義を語彙化すれば $V(non-habet-impers_2): [(L, S_x, (X \in (U - L)))]$ となろう。明らかなようにこれは事実上の存在文に外ならない。この種の構文における対象 X が生格でなく対格に立つ所以である。

⁴⁵ 注 35 参照。

§37 §32 において述べたようにブルガリア語、セルボ・クロアチア語においては *има-няма*, *има-нема* のように存在文と存在否定文は現在時称において対称的である。しかし現在の場合でもたとえばセルボ・クロアチア語では *Моје село је на мору*. 「私の村は海のほとりにある」、*у селу је ново пионирско одмаралиште*. 「村には新しいピオネールの休息の家がある」のような場合には、*esse* 型存在文が用いられる。

ブルガリア語においてもたとえば *Гаражът е зад хотела*. 「ガレージはホテルのうしろにある」、*Книгата е на масата*. 「本は机の上にある」のような場合には、同じく *esse* 型存在文が用いられる。これは「村」あるいは「休息の家」の存在が前提となっていることによると考えられる。ブルガリア語において *esse* 型存在文の主語が後置定冠詞をとるのが通例となっているのに対して *има* + *N_{acc.}* の名詞がこれをとらないことは、このことを裏付けている。

このことから逆に *habet-impers.* 型存在文は着目する対象の存在について、いかなる前提をも有しないか、少くともその「存在度」が *esse* 型に較べて稀薄であるといえようである。セルボ・クロアチア語において *нема* のみならず肯定の *има* すら、対格形のかわりに生格形をとることが多いのも、このような *habere* 型非人称存在文における対象の「存在度」の故であるとして、説明することができよう⁴⁶。これを仮に語彙化すれば、 $V(\text{serb.-cr. } \textit{има}) : [L, R_x, (x \in L)]$ ということになろう⁴⁷。

§38 またセルボ・クロアチア語の場合、現在時称以外の存在文は *esse* 型によって代えられるのが通則となっている。たとえば、

(26) Код нас има и воде и сунца.

「我々の許には水も太陽もある。」

(27) У Београду има девојака и дечака кои говоре одлично енглески.

「ベオグラードには英語をよく話す青年達や娘達がいる。」

に対して

(28) Код нас је било и воде и сунца.

「我々の許には水も太陽もあつた。」

(29) У Београду ће бити девојака и девојка кои...

「ベオグラードには英語をよく話す青年達や娘達がいるだろう。」

⁴⁶ Grozdić, O., *Serbo-Croatian Grammar and Reader*, New York-London 1969, p. 68.

⁴⁷ 統辞論的にみれば中国語の「有」と「没有」は非人称 *habere* 型存在文並びに存在否定文、「在」及び「不在」は人称 *esse* 型存在文並びに存在否定文と考えられるが、この両者について上述のような「存在度」の問題がみられないであろうか。専門家の御教示を仰ぎたいところである。

ウクライナ語においても *habere* 型の現在非人称存在否定文は、過去及び未来時称においてたとえば *Снігу не було*、「雪はなかった」、*Морозів не буде*、「寒気はないだろう」のように、*esse* 型非人称構文によって替えられるのが通則となっている⁴⁸。

このような現象の由って来たる所以については、残念ながら未だ詳にはしない。その解明には十分な資料の蒐集と分析が必要とされるであろう。ただこれまでの議論から推して考えれば、非人称構文が発話の状況乃至場そのものを行為の認定のための状況の変化の担い手とする(仮説1)ことと関係があるのではないかと考えられる。すなわち存在否定文の場合、着目する対象が一定の状況の構成要素でないことは、すでに述べた通りであるが、過去あるいは未来の場合にはこれに加えて状況そのものすら、話者の眼前には存在していないのである。してみればこれは共に「存在」していない「状況」乃至「場」と、発話の内容とすべき着目する対象との何れを選ぶべきかという問題に帰着せざるを得ない。

きわめて常識的に考えれば、この場合にはテーマとして着目する対象を選ぶとするのが自然であると思われる。もしこの推論が誤っていないとすれば、これは *esse* 型存在否定文となるに違いない。また主語とテーマとを区別しようとする言語の場合、着目する対象をあらわす名詞は生格 R_x に立つことになるであろう。

X. *dare* 型存在文

§39 *dare* 型存在文は極めて稀であり、典型的なものとしては、ドイツ語にみられるばかりである。この型はドイツ語においても16世紀には未だ稀であり、屢々みられるようになったのは、漸く17世紀に至ってからであるといわれる⁴⁹。たとえば

(30) *Es gibt nur einen Gott in der Welt.*

「世の中にはただ一つの神が存在するだけだ。」

これに対して *esse* 型の存在文もまた存在している。たとえば、

(31) *Es sind dreißig Schüler in dieser Klasse.*

「このクラスには30人の生徒がいる。」

桜井氏によれば両者の相違は、後者が一定範囲の存在をあらわすのに対し、前者は一般的存在または自然的存在をあらわすのを、原則とするところにあるとされる⁵⁰。

sein が一定範囲の存在をあらわすというのは、これまで述べ来った *esse* の意義からして当然である。また *es gibt* + N_{acc} の *es* が絶対に省略できないのに対して、*es ist/sind* + N_{nom} における *es* は動詞 *sein* と文法的一致を行わず、これを省くことができることか

⁴⁸ Zyatková (注20), p. 122 参照。

⁴⁹ Miklosich (注13), p. 356 参照。

⁵⁰ 桜井和希『ドイツ広文典』第十五版 第三書房(昭和28年), p. 118 参照。

ら、これは真正の非人称文ではないと考えられる。これはいわば偽装非人称文であって、es はこの場合いわゆる introductory it にすぎない。

ところで dare の原義は、たとえば手にリングをもった人が他の人の手にそのリングを渡す場面を想像すれば明らかなように、一定の状況において着目する対象が、その対象の一部をなす副次的対象を、更に第三の対象の状態の構成要素の一部に帰属せしめることであると考えられる。したがってこれは図式的には次のようなものとなろう。 $V(dare): [dS_x, S_y, dS_z, ((S_z \subset S_x) \rightarrow (S_z \subset S_y)) \cup K]$ である。もしこれが非人称構文をとるとすれば、仮説1により $V(dat.-impers.): [dL, S_y, dS_z, ((S_z \subset L) \rightarrow (S_z \subset S_y)) \cup K]$ 。これが存在文となるためには $S_y = U$ という条件が必要となろう。すなわち K を空集合として⁵¹ $V(dat.-impers.): [dL, U, dS_z, ((S_z \subset L) \rightarrow (S_z \subset U))]$ 。ところが $L \subset U$ であるから $((S_z \subset L) \rightarrow (S_z \subset U))$ は結局 $(S_z \subset U) = (z \in U)$ 。従ってこれは最終的には $V(dat.-impers.): [L, U, S_z, (z \in U)]$ ⁵²。

このことから dare 型が存在文となるためには、これが非人称構文をとり、かつ着目する対象が普遍的な世界の構成要素となることが、必須の条件であることが理解されるであろう。

§40 このような考え方は理に走った、いかにも牽強附会の説であると感じられる向もあるかも知れない。しかし dare と esse が言語的に比較的近い意義をもって使用される事は、実際にも決して稀な現象ではない。たとえば、

(32) in geometria prima si dederis, danda sunt omnia: dato hoc, dandum erit illud.
(Cic. Fin. 5, 28, 83)

「幾何学においてもし(君が)最初のもの(=公理)を与えたならば、すべてのものが与えられることになる。これを与えれば、かのものが与えられることになる。」

この場合 dederis は一応二人称単数であるが、一種の普遍人称文と考えてよい。「誰が」というのはさほど大きな意味をもつものではない。また「誰に」与えるかについても、別に定められていない。強いて言えば「現実に」というほどの意味である。また公理の選択は主語によってあらわされる対象の恣意に任されているが、その帰属関係は必しも明確でない。ここからこの種の dare の意義は、本来の意義 $V(dare): [dS_x, S_y, dS_z, ((S_z \subset S_x) \rightarrow (S_z \subset S_y))]$ の S_y を場所 U に変え、かつ $(S_z \subset S_x)$ を省略したものということができよう。これを仮に語彙化して $dare_1$ とすれば、その意義は $V(dare_1): [dS_x, U, dS_z, (\rightarrow S_z \subset U)]$ となろう。

⁵¹ K は日本語では空ではない。「手渡す」と「与える」を比較すれば明らかなように後者には「勢力圏」、あるいは「所有」の概念が条件として含まれている。しかしヨーロッパの言語では、むしろ dare の方が条件をもたないと考えられる。

⁵² L が dL とならないのは、条件の「 $\rightarrow$ 」が消えたからである。

一方 *dandus* のようないわゆる *gerundivum* は受動の意義をもつとされる。ここでは *diathesis* については扱わないから、これを仮に *Pass.* と表示することにし、 dare_1 に対応する受動形式を dari_1 とすれば、その意義は $V(\text{dari}_1) : \text{Pass.}[dS_z, U, (\rightarrow (Sz \subset U))] = [dS_z, U, (\rightarrow (z \in U))]$ とあらわすことができよう。これが $V(\text{esse}) : [Sx, L, (X \in L)]$ と極めて近い意義をもっていることは、一目瞭然である。

事実たとえばラテン語において *dari* が屢々 *esse* の意義に用いられる例がみとめられるという。たとえば、

(33) *His Caesar ita respondit: eo sibi minus dubitationis dari, quod eas res quas legati Helvetii commemorassent memoria teneret...*

(*Caes. Bell. Gall.* 1-14, 23-25)

「これらの者達にカエサルは次のように答えた。自分には(そのことについて)殆んど疑いはない。ヘルウェティアの使節の述べた事を憶えているから。」⁵³

しかし *dari* と *esse* を較べれば明らかなように、後者が状態動詞であるのに対して、前者は行為動詞である。*dare* 型存在文の一般化を妨げる最も基本的な理由はこの点に存していると考えられる。*dare* の場合状態性は受動分詞による回説形式によって獲得することができるが、この場合にもこれが行為の結果としての状態に過ぎないことは、如何ともし難い。「所与の」、*данный*, *gegeben*, *given* などが、何れも存在そのものというよりは、いわば条件的存在といったものの表現に専ら用いられるのも、このために外ならないと思料せられる。

⁵³Regula, M., *Grundlegung und Grundprobleme der Syntax*, Heidelberg 1951, p. 60. この文献については京大ドイツ語教室西本美彦氏に御教示いただいた。

Summary

On the Meaning of Existential Sentences

As an introductory note to the study of the true meaning of impersonal constructions, existential sentences are observed in this article both in their affirmative and negative variations. The observation is made on the basis of the hypotheses concerning semantic peculiarities of verbs, which have been proposed in a series of the previously published articles. It is pointed out, that the implication of a notion of "locus" is quite essential to the meanings of *verba existentiae*. In addition to the above mentioned hypotheses, still other two hypotheses are proposed anew in this article about the subject of impersonal sentences and the function and rôle of genitive case of noun in these sentences. In conformity with the kind of verbs used, existential sentences are divided into three, i.e. into *esse*-type, *dare*-type and *habere*-type. These types are at first considered separately and then the relationships among these types as well as the differences between personal and impersonal constructions are also discussed.